

婦人十一題

泉鏡太郎

青空文庫

いちぐわつ
一月

うまし、かるた會に急ぐ若き胸は、駒下駄も撒水に之る。戀の歌を想ふにつけ、夕暮の線路さへ丸木橋の心地やすらむ。松を鳴らす電車風の春着の袖を引合す。急き心も風情なり。やがてぞ、内賑に門のひそめく輪飾の大玄關より、絹足袋を軽く高廊下を行く。館の奥なる夫人の、常さへ白鼈甲に眞珠を鏤めたる毛留して、鶴の膚に、孔雀の装にのみ馴れたるが、この玉の春を、分けて、と思ふに、いかに、端近の茶の室に居迎ふる姿を見れば、櫛卷の薄化粧、縞銘仙の半襟つきに、引掛帯して、入らつしやい。眞鍮の茶釜の白鳥、出居の柱に行燈掛けて、燈紅く、おでん爛酒、甘酒もあり。

——どツちが好いと言ふんですか——
——知らない——

にぐわつ
二月

都みやこなる父母ふぼは歸かへり給たまひぬ。舅しちち姑とめ、知しらぬ客きや許あまた多あり。附つき添そふ侍じちよ女を羞はぢらひに辭じしつゝ、
 新よめ婦きみの衣きぬを解とくにつれ、浴ゆ室どの颯さつと白しろ妙たへなす、麗うるはしき身みとともに、山やまに、町まちに、廂ひさしに、
 積つもれる雪ゆきの影かげも映さすなり。此この時とき、われに返かへる心こころ、しかも湯ゆ氣げの裡うちに恍くわう惚こつとして、彼か
 處しこに鼈べつ甲かふの櫛くし笄がの行ゆく方も覺おぼえず、此こゝ處にに亂みだればこ箱ひぢりめんの緋わ縮ちり緬めん、我わが手てにさへ袖そでをこぼれ
 て亂みだれたり。面おもて、色いろ染まぬ。姿すがた見みの倂おもかげひとへ花はな瓣びら薄うすくれなる紅に、乳ちをおさへたる手ては白
 くかさなり咲さく、蘭らん湯たうに開ひらきたる此この冬ふゆ牡丹ぼたん。蕊しべに刻きざめるは誰たが名なぞ。其その文もじ字こんじ金
 色きに輝かくまくに、口くち渴あき又また耳みみ熱ねつす。高たか島しま田だの前まへ髪がみに冷つめたやいほ、窓まどを貫つらぬすだれ簾すだれなす
 氷つら柱ちゆうにこそ。カチリと音おとして折をつて透すかしぬ。人ひとのもし窺うかがはば、いと切せめて血ちを迸とばすあ
 ひくち首おびとや驚おどろかん。新よめ婦きみは唇くちびるに含くみて微笑ほくそみぬ。思おもへ君きみ……式しき九く獻けんの盞さんよりして以この來かた、
 初はじめて胸むねに通とほりたる甘あまく清すずき露つゆなりしを。——見みたのかい——いや、われ聞きく。

さんぐわつ
三二月

浅あさ蛸りやア浅あさ蛸りの剥むき身み——高たか臺だいの屋やし敷き町まちに春はる寒むき午ご後ご、園その生ふに一ひと人り庭には下げ駄たを爪つま立たつま

で、手を空ぎまなる美き女あり。樹々の枝に残んの雪も、ちらくくと指の影して、大なる
 紅日に、雪は薄く紫の袂を曳く。何に憧憬るゝ人ぞ。歌をよみて其の枝の紅梅の苔を
 解かんとするにあらず。手鍋提ぐる意氣に激して、所帯の稽古に白魚の造る也。然
 も目を刺すがいぢらしとて、ぬきとむるは尾なるを見よ。絲の色も、こぼれかゝる袖口
 も、繪の篝火に似たるかな。希くは針に傷つくことなかれ。お嬢様これめせと、乳
 母ならむ走り來て捧ぐるを、曰く、エプロン掛けて白魚の料理が出来ますかと。魚も活
 くべし。手首の白き更に可三寸。

四月

舳に肌ぬぎの亂れ姿、歌妓がさす手ひく手に、おくりの絃の流れつゝ、花見船漕ぎ
 つるゝ。土手の霞暮れんとして、櫻あかるき三めぐりあたり、新しき五大力の舷の高く
 すぐれたるに、衣紋も帯も差向へる、二人の婦ありけり、一人は高尙に圓鬚ゆひ、
 一人は島田艶也。眉白き船頭の漕ぐにまかせ、蒔繪の調度に、待乳山の影を籠めて、
 三日月を載せたる風情、敷波の花の色、龍の都に行く如し。人も酒も狂へる折から、ふ

と打ちすましたる鼓ぞ冴ゆる。いぎ、金銀の扇、立つて舞ふよと見れば、圓鬚の婦、な
 よやかにすらりと浮きて、年下の島田の鬢のほつれを、透彫の櫛に、搔撫でつ。心
 憎し。鐘の音の傳ふらく、此の船、深川の木場に歸る。

五月
 五月

五月雨の茅屋雫して、じとくと沙汰するは、山の上の古社、杉の森の下闇に、
 夜なくく黒髪の影響あり。呪詛の女と言ふ。かたの如き悪少年、化鳥を狙ふ犬となりて、
 野茨亂れし岨道を要して待つ。夢か、青葉の衣、つゝじの帯の若き姿。雲暗き山の端よ
 り月かすかに近づくを、獲ものよ、虐げんとすれば、其の首の長きよ、口は耳まで裂けて、
 白き蛇の紅さしたる面ぞ。キヤツと叫びて倒るゝを、見向きもやらず通りしは、優にやさ
 しき人の、黄楊の櫛を唇に銜へしなり。うらぶれし良家の女の、父の病氣なるに、夜
 半に醫を乞へる道なりけり。此の護身の術や、魔法つかひの教にあらず、なき母の記念な
 りきとぞ。卯の花の里の温泉の夜語。

裾野の煙長く靡き、小松原の靄廣く流れて、夕暮の幕更に富士山に開く時、其の白
 妙を仰ぐなる前髪清き夫人あり。肘を軽く窓に凭る。螢一つ、すらりと反對の窓よ
 り入りて、細き影を捲くと見る間に、汗埃の中にして、忽ち水に玉敷ける、淺葱、藍、白
 群の涼しき草の影、床かけてクシヨンに描かれしは、螢の衝と其の裳に忍び棲に入り
 て、上の薄衣と、長襦袢の間を照して、模様の花に、葉に、莖に、裏透きてすらく
 と移るにこそあれ。あゝ、下じめよ、帯よ、消えて又光る影、乳に沁むなり。此の君、其
 の肌、確に雪。ソロモンと榮華を競へりとか、白百合の花も恥づべき哉。否、恥らへる
 は夫人なり。衣紋明るく心着きけむ、銀に青海波の扇子を半、螢より先づハツと面を
 蔽へるに、風さらくと戦ぎつゝ、光は袖口よりはらりとこぼれて、窓外の森に尚
 美しき影をぞ曳きたる。もし魂の拔出でたらんか、これ一顆の碧眞珠に、露草を鏤
 れるなるべし。此の人もし仇あらば、皆刃を取つて敵を討たん。靈山の氣、汽車に迫れ
 り。——山北——山北——

しちぐわつ
七月

其の邊の公園に廣き池あり。時よし、風よしとて、町々より納涼の人出で集ふ。童
 たち酸漿提灯かざしもしつ。水の灯美しき夜ありき。汀に小き船を浮べて、水茶屋
 の小奴莞爾やかに竹棹を構へたり。うら若き母に伴はれし幼兒の、他の乘るに、わ
 れもとて肯かざりしに、私は身弱くて、恁ばかりの船にも眩暈するに、荒波の海としな
 らばとにかくも、池の水に伏さんこと、人目恥かしければ得乗らじとよ。強ひてとならば
 一人行け、心は船を守るべし。舳にな立ちそ、舷にな片寄りそ。頼むは少き船頭衆とて、
 さみしく手をはなち給ひしが、早や其の姿へだたりて、残の杜若裳に白く、蘆のそよ
 ぎ羅の胸に通ふと、星の影に見るまゝに、兒は池のたゞ中に、母を呼びて、わつと泣きぬ。
 — 盂蘭盆の墓詣に、其のなき母を偲びつゝ、涙ぐみたる娘あり。あかの水の雫なら
 で、桔梗に露を置添へつ、うき世の波を思ふならずや。

はちぐわつ
八月

わか 若きものの、山深く暑を避けたるが、雲の峰高き巖の根に、嘉魚釣りて一人居たりけり。
 へきたん 碧潭の氣一脈、蘭の香を吹きて、床しき羅の影の身に沁むと覺えしは、年經る庄
 や もり 屋の森を出でて、背後なる岨道を通る人の、ふとイみて見越したんなる。無地かと思
 こん すきや ふ紺の透綾に、緋縮緬の長襦袢、小柳縹子の帶しめて、袴の堅きまで慎ましきにも、
 すがた 姿のなよやかさ立ちまさり、打微笑みたる口紅さへ、常夏の花の化身に似たるかな。
 がけ しみづ 斷崖の清水に龍女の廟あり。われは浦島の子か、姫の靈ぞと見しが、やがて知んぬ。
 りうちよ 女の廟あり。われは浦島の子か、姫の靈ぞと見しが、やがて知んぬ。
 そ なくくに時ののはやりに染まぬ服装の、却つて鶯帶蟬羅にして、霓裳羽衣の風情
 のうか をなせる、その農家の姉嬢の、里の伯母前を訪ふなりしを。

くぐわつ
九月

でみづ 洪水は急なりけり。背戸續きの寮屋に、茅屋に侘ぶる風情とて、家の娘一人居たる午
 すはや すぎよ。驚破と、母屋より許嫁の兄ぶんの駈けつくるに、讀みさしたる書伏せもあへ
 おもや ず抱きて立てる、葉の萩も濡縁に枝を浪打ちて、早や徒渉すべからず、あり合はず
 しをり はぎ ぬれ えん えた なみう は ちかわたり せすべからず、あり合はず
 たらひなか 盥の中に扶けのせつ、盥して逃る。庭はさながら花野也。桔梗、刈萱、女郎花、

我亦紅、瑠璃に咲ける朝顔も、弱竹のまゝ漕惱めば、紫と、黄と、薄藍と、浮
 きまどひ、沈み靡く。濁れる水も色を添へて極彩色の金屏風を渡るが如く、秋草模
 様に露敷く袖は、丈高き紫苑の梢を乗りて、驚き飛ぶ蝶とともに漾へり。山影ながら
 颯と野分して、芙蓉に咽ぶ浪の繁吹に、小き輪の虹が立つ——あら、綺麗だこと——それ
 どころかい、馬鹿を言へ——男の胸は盥に引添ひて泳ぐにこそ。おゝい、おゝい、母屋に
 集へる人数の目には、其の盥たゞ一枚大なる睡蓮の白き花に、うつくしき瞳ありて、す
 らくと流れ寄りきとか。

じふぐわつ
十月

藍あさき宵の空、薄月の夜に入りて、雲は胡粉を流し、一むら雨廂を斜に、野路の刈
 るかや萱に靡きつゝ、背戸の女郎花は露まざる色に出で、茂れる萩は月影を抱けり。此の
 とき、草の家の窓に立ちて、秋深くものを思ふ女。世にやくねれる、戀にや惱める、避暑の
 頃よりして未だ都に歸らざる、あこがれの瞳をなぶりて、風の音信るともあらず、はら／＼
 と、櫛の葉、柿の葉、銀杏の葉、見つゝ指の撓へるは、待人の日を算ふるや。爪紅

を其のまゝに、其の木の葉一枚づつ、君來よ、と染むるにや。豈ひとり居に堪ふけんや。袖笠かつぎもやらす、杖折戸を立出づる。山の根の野菊、水に似て、渡る棲さき亂れたり。曼珠沙華ひらくと、其の左右に燃えたるを、あれは狐か、と見し夜戻りの山法師。稲束を盾に、や、御寮、いづくへぞ、とそゞろに問へば、莞爾して、さみしいから、田圃の案山子に、杯をさしに行くんですよ。

じふいちぐわつ
十一月

朝の雲吹散りたり。風凧ぎぬ。藪垣なる藤豆の、莢も實も、午の影紫にして、谷を繞る流あり。穗たで露草みだれ伏す。此の水やがて里の廓の白粉に淀むと雖も、此のあたり、寺々々の松の音にせゝらぎて、殘菊の零潔し。十七ばかりのもの洗ふ女、帯ほそこしわね、たらひか、のききにせゝらぎて、芭蕉の葉、日ざしに翳す扇と成らずや。頬も腕も汗ばみたる、袖引き結へる古襷は、枯野の草に褪せたれども、うら若き血は燃えんとす。折から櫛の眞紅なるが、其のまゝの肌着に映りて、竹堰の脛は霜を敷く、あゝ、冷たからん。篋の水を受くるとて、嫁菜の莖一つ摘みつゝ、優しき人の心かな、何のすさ

にもあらで、其の鹽にさしけるが、引とき衣の藍に榮えて、嫁菜の淺葱色冴えしを、
 菜島の日南に憩ひて、恍惚と見たる旅の男。うかと聲を掛けて、棟あちこち、伽藍
 の中に、鬼子母神の御寺はと聞けば、え、紅い石榴の御堂でせうと、睨に色を染めなが
 ら。

大正十二年一月—十一月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあつた年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「婦人十一題《ふじんじふいちだい》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

婦人十一題

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>